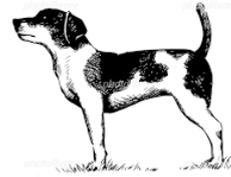


獵犬物語は、3-1 組の勝又訓男さんが狩獵・獵犬とのかかわりを通じて人と自然の共生を描いた物語です。

令和2年11月に発行された『公民館だより』202号から令和5年9月に発行された『公民館だより』219号まで18回にわたり連載されました。



獵犬物語

勝又 訓男



第一話(昭和一八年頃の話)
仲間が大切 愛に生きるチビ

白黒のブチで半長毛の小柄な犬が農舎の稲わらの上で寝ていた。

私は中一の二学期が始まり、農家は稲刈り、そんな秋の日の夕方だった。近寄ると起き上がった。尻尾を下げて困った表情だが、尾は振っていた。お腹が大きかったー。家では犬は飼ったことがない、内心は欲しかった。

私の父は日中戦争から帰って間もなく、又世界大戦に召集されていなかった。祖父と母で農業 手間不足でとても忙しかった。

野良から帰って来たジイチヤンに犬の事を説明した。ジイチヤンは暫く 犬と私の顔を見てから「ウンウン可哀そうだから

子供が生まれる間置いてやれ」と。

三日程して子犬が四つ産まれた。ジイチヤンは一匹残して何処かに持っていった。「誰も飼ってはくれないと思うから(食糧難の時代)な、親が可哀そうだから一つ置いてやった、お前学校から帰ったら、これの分まで百姓手伝えよ」。

五人兄弟の頭の私は稲刈り芋掘りと自分なりに頑張った。朝登校前に大きな背負い籠「一杯の草を刈って来て、家畜にやる、私に課せられた仕事だった。

子犬が乳離れして秋の田畑の収穫も済み、私の刈る草も伸びなくなった。

ジイチヤンは馬力車ばりきで山に行き林の枝打ち間伐を兼ねて一年分の燃料取りまきに精出していた。日曜日に私も手伝いに、チビを連れて、安定の悪い山の斜面にかけたハシゴはグラグラする、真剣にやらないと大怪我だ。

チビは山に着くとすぐ見えなくなった。向むかいの小尾根の方で、「キャン キャン」と犬の声が移動して行く。普段聞く犬の吠

え声と違う。随分といそがしうだー。

「そろそろお昼にしようか」と、ジイチヤンとお弁当を広げた。「チビは何処へ行っちゃったのかなあ」、「山へ来たから古巣を思い出して帰っちゃったのかもしれないな」、話している所にチビが重そうに何かを引っばって帰って来た。

「山うさぎだ」ジイチヤンの前に置くと自慢そうに鼻を鳴らして尾っぽを振っている。「おおそうかそうか うさぎを追っばらっていたのはチビだったのか、山兔を捉まえるなんて えらく速いんだ、こんなうさぎをー、力も強いしー、喰わないで持って来て、うんうん、ジイにくれるのか そうかそうか 有りがとうよ。お前腹が減ったろうそれ お昼ご飯食べな」、チビの頭を何度も撫でながらジイチヤンは弁当箱のふたにご飯を分けて与えた。

昼食後 さんにん で頭を並べて午睡した。ジイチヤンが、「チビは又稼ぎに行ったのかな俺たちも もうひと息頑張ろう」、ジイチヤンは切った枝を集めて束たばにした。

チビは午後にも うさぎを捉まえて来た。

世界戦争のさなか食料は配給され、農家の米麦もすっかり管理される時代、どこにも肉など売っていない、兎二羽は大きな収穫だ。初冬しよとうのその日からジイチャンが山仕事に行く度チビの奮闘で兎の肉が食卓を賑わした。ところで祖父は明治二十七年、二八年の日清戦争、同三七年、三八年の日露戦争ともに出征した。

ロシア戦では 中国北部を侵略した世界最強を誇るロシア陸軍が待ち受ける旅順りよじゆんの二〇三高地攻略に参戦した。日本軍ロシア軍双方で六万人も戦死した、その生命を楯に要塞を占領し日本は勝利した。

ジイチャンは「人は国のため皆んなのため戦うべき時もある」。戦争と云う厳しい「ながら」の中、自分からその生を左右することはかなわない。天、自然界に全うさせていたのだ。その生命を「大切」にし、又ほかの者にも情けをかける、かけた生命はいつか返ってくる。農家は鶏や兎を可愛がって育て、心をこめて野菜を作る。感謝して

それを食べさせていただく。矛盾しているようだけれど、これは自然の摂理だ。十三才になった孫にジイチャンは云った。

農家に生まれたから、鶏や兎をやっつけて食べることを何も考えず当然の事と思っていた。山でチビを見て、野生の鳥や獣がいて狩りをする犬がいる。狩人もいてその自然の世界と人々の暮らしは繋がっている。チビの生き方も教訓に、ジイチャンから教えて貰った。ながれの中の生命」と云うものを意識するようにになった。

春が近くなった頃、チビに発情が来た。

当時、犬は放し飼いが多かったから、雄犬がいくつも来るようになった。「又、子犬が産まれると大変だから、チビを土間に入れて戸を閉めておこう。半月もすれば終わるから」。何日か過ぎて表へ来る犬の数がだんく増えて来た。夜になると戸を足でかく音、体ごとぶつかる音。

「煩うるさいから、その杖を持って追っばらいなよ」と母、戸を少し開けたら鼻でこじ開けて大きな犬の顔、びっくりも手伝って持った杖で思いつ切りた、いた。ギャンー。引っ込んだ、逃げたか

など、少し開けると又別の犬が突っ込んで来た。慌て、ボコンボコン。

朝になつて弟達と登校の支度をして表へ出た。いくつもの雄犬が私を見ると急いでよけ乍らも、尻しつ尾を振っている……？。

母が「昨夜犬を叩いたから表に出ると噛まれるかも、気をつけなよ」と云ったが、雄犬達はなぜか悪さをして叱られた飼犬のように「私のご御機嫌をとつている。そんな日が一週間ばかり続いた或る朝、家の回りから犬達の姿が消えた。

次の日チビも鎖から放した。以前は鎖から放すと飛び上がって喜んだのに、チビはよそよそしい態度もあらわに、私と目を合わせないで出かけて行った。「今日は一日見なかったよ。朝あげた餌もそのままあるし」と母が云った。

三日目にチビが帰つて来た。餌はやつても食べなかった。又出かけないように繫いで置いた。次の日何も食わないチビを

氣遣つて、母が「元々繫がれた事のない子だから放して置けば機嫌が直るんじゃないの？」放されたチビは手の平を返したいように鼻を鳴らして体をすり付け

て来た。こんなことは今までに殆んどなかった。「繫いで悪かった、よしよし」チビと目を合わせ頭を撫でた。それがチビとの馴合いの最後だった。

思いかえせば、あの発情の時、棒で雄犬たちを叩いた。その時叩かれていないチビが時々小さな声で「キャン」と鳴いた。放して貰いたくて鳴いたのではなかった。チビのこと「好きだ」と寄つて来る「彼氏」たちをボコボコ叩くから鳴声が出たのだ。彼氏に辛く当る親父に反旗を翻す、娘の心境だ。チビは出かけたまゝ、帰らない。

チビは消えた。

自活もよし飼われるもよしの自由気儘な奴。恩返しとか儀理とか人は云うけれど、兎を獲つて持ち帰ることは祖父や私を含めた群仲間なかもうち内の当然の仕事であつたのかも知れない。

自己主張旺盛で

愛の為に生きる、チビ。

【第一話・完】

第二話(昭和二十六年頃の話)

まみ うつぎ獵犬 牝

中野の弥一さん、二十四才と十二才の息子さんがいる朴訥な親父さん。

その弥一さんがいつもうさぎ射ちをしてる山、城山周辺、其処へ二十才の狩獵一年生、山も狩も、ど素人の私が鳥射ちに行く。

先輩は、鳥獵(飛鳥射ち)はやらない、居鳥射ちとうさぎ射ち。私の鳥犬が兎を追跡中の犬の邪魔をしなれば問題はない。丁度いいことに私の犬は、犬見知り?で他犬の傍は嫌い。ということでは、出会う度に弥一先輩から雉、山鳥の餌場等を教えて貰った。

弥一さんの兎犬は「まみ」と云う白黒の斑で垂耳の雑種犬。キャンキャン鳴きだけれどよく鳴き、足も軽く切れよく追う。「足が速いからうさぎが早く回ってくる。勝敗は早いよ」

と、数獲用?の兎犬。

寝家を追い出された兎は、犬が追ってくることを確かめると、全速力で一息走って犬を離す、ゆっくりになる。犬は、兎が行って少時過ぎると臭いがやや薄くなる、と足は速くなり追い鳴きの間は遠くなる。鳴かなくなる。兎は、動きを止めて様子を見る。犬が追い付いて大声で騒ぎ立てる。

又、全速で引き離す、休む、の繰り返し。その内、兎は犬を撒くことを考え、先程追われて通った同じ獣道を走って来て突然、横に一とつ跳び、三米位跳んで材木の切株の裏とかに潜む。臭いに乗って追って来た犬が通り過ぎると十米も行かない内に、ピョンツと獣道に戻って、後足立って犬のお尻を見て、「エイイのろま」、で、元来た方に消える。

犬は暫く行って「これは今の臭いじゃない」、慌てて逆嗅ぎして戻ってくる。そのまま追いはぐれてしまうこともままある。

犬はぐるぐる回って一番新しい臭いをみつけて跳んで行

く。初めに犬が起こしたこの兎の寝家の辺りで又追鳴きが聞こえてくる。一晚中行ったり来たたりしたテリトリー(領域)、この兎の臭いで一杯の所、兎は自分の臭いを嗅いで、犬が追ってくるので、小川を渡ったと見せかけて川の中を上に行ったり下に行ったり、臭いの付き難い風通しのいい硬い人道を走ったり、あらゆる技を駆使して身を守る術を考ずる。

兎も色々やるけれど、狩人はその上をゆく(いったつもり)。犬の鼻を誤魔化すため兎が同じ獣道を幾度か通る、とみてその通り道にタズマ(撃つ為に待つ場)を張る、ころを経た兎はその又裏をかく、の繰り返し。話しも行ったり来たり?まみが追い返して来た兎を弥一さんが、ドンツと矢(弾)を

くれる。後は当たって捕獲しても、外れて逃がしても「テツポウ鳴った、オワリ」で、まみは止める。散弾が当たらなくても驚かされた兎は逃げる山を換える。暫くはこのテリトリーには戻らない。日本犬の血の入った雑種獵犬は頭がよく自主性

も強く、起ったことを考え解釈をした結果、止めた。

然しここで主人が「止めるな。何でも追え」と犬が止めた所に呼んで「行け」と言われれば「ガマン」して続ける兎犬になる。

それが極く普通の兎犬の辿る道であり、殆んど狩人(私も含めて)が、犬が命令に従ったことに満足し、犬の自主性を殺してしまったことに気がつかない。世話好きな訓練士に味のある獵犬、名犬は仕上がらない。

追跡を止めたまみは、主人の元に戻って一休み。「よし行くか」、又新たな兎を起すべく搜索を始める。

のんびり道楽鉄砲なんてしていられない。数獲りをしたいと云ったら語弊があるけれど、道楽以前に肉を多く欲しい。自分で豚や鶏を育てて販売しているが、それは農家としての収益。戦後数年、未だ食糧難の時代、この頃の大多数の狩獵者は、家族や友人の口に入れる肉くらいは自分で獲った。

と、云うことで、まみとの獵は楽しくもあり、数獲りも出来

る。家族にも協力的で、弥一家にとつてまみは、大事な愛犬だ。そんな年の夏の盛り、弥一さんの次男坊の達郎さん、同地区にある〱送電線鉄塔建設会社〱に十六才のとき入社して高所作業の職人、となつていたが、お盆休みで帰宅した。

まみは今八才。達チャンが、中学一年生の時に仔犬。達チャンに可愛いがられ、遊び相手となつて育つた。二年が経ち、まみもやや一犬前の兎猟が出来るようになつた頃、達チャンは弟子入りして、遠く離れた送電建設現場（日本中）へ。家に帰れるのは盆と正月だけ。帰宅して三日ばかり、達チャンが「山へ行く」、「お弁当は?」、「弁当はいらない、まみの食物は持った」。何か四角いものが入つた見慣れない黒いリュックを背負つて。毎年お盆としに帰つて来ると、まみと山遊びに出掛ける。久し振りの達チャンとのデートに、すつ飛びあがつて出かける。それが、その時は心なしか浮かばない様子。「まみは身体の具合でも悪いのかな?」と達チャンのお母さんは思った。

その日、夜になつてもふたりは帰らなかつた。近所の人達も心配して集り、地域の消防団員は弥一さんについて山へ、大声で呼び乍ら峠に近いところ迄。夜の山は静かで呼声は遠く迄聞こえる筈。しかし何の音沙汰もない。生憎の曇り空（この時代・昭和二十六年頃・夜が来ると街の灯りは全て消える）、世間が真の闇。危ないからこの辺で帰ろう、明日早朝にわしが長尾峠から位牌岳、ぶなの木の方迄見に行きます。鉄砲射ちで幾度も行ったことのあるまみが一緒だから必ず何処かにいるよ」と。

近所に住んでいる達チャンの叔母も泊まつてくれた。長い眠れない夜が白みはじめる頃「まみが来たつ」、叔母の金切声。親父さんが真つ先に飛び出した。まみが啣くわえて運んで来たものゝ肘のあたりで千切れた片手、達郎だ!。きびしい声とは裏腹に、静かにソーツとまみからその腕を受け取つて胸に抱えた親父さんが、相談するように「まみ、どこだ?ツ

レテイテクレ、どこだ」。しょぼくれているまみの気持ち壊さないように、頼りの綱のまみに。まみが踵かかとを返してとぼとぼと歩き出した。親父さんは、腕を抱えたまま、靴を履く間ももどかしくまみの後ろを。みんなが乗り出した。

「誰も行かないで、まみの気が散る」と達チャンの兄が、「親父の答えが出る迄、山に出来ないように、消防の人達にも伝えて欲しい」と家に居る者に言い残して、兄も見え隠れに後を追つた。

城山から入り高倉たかぐらを横巻に上へ上へと、勝手知つた獵場を歩くまみと親父さんの足は意外と速く、付いて行くのが忙しい。長尾峠の手前で止まつた。親父さんがしゃがみ込んだ。「見つけたのかな、何か?」様子の解る位置までそつと近づいた。並んで四ツん這いになつて水を飲んでゐる。水上かみがまみ、下が親父。ふたりは、仲間だ。〱いざ一番〱のときは一体なんだ。

ここまで一時間半、歩き始めより随分と速度が上がつた。獵犬だから主人の向いてゐる方向に

ただただ只々無意識に歩いてゐるのではなからうか、と疑う訳ではないが心配し乍ら付いて来たけれど、ふたりは互いの気持ちを讀んで、一つの目的の為に急いでゐる。

〱まみは我が家の忠犬〱「まみは必ず弟のいる所に連れて行くに違いない」、兄はそう思えた。その辺りから、狩人か御料地（宮内庁）の見回り役人しか通らない獣道に近い道を登つて、千尋高（山）を巻き上げて真尾根の西側下を水平に走る山回り役人用の経路に出た。ケヤキ、ぶな、楓等の大木の中の細い道を南へ、沢に差し込み、小尾根を出つ張りして、ふたりの足は増々速くなつた。見失わないように、確かめ乍ら進むことと小一時間、真尾根に何とも四角い気になる峰が見えた。「オ、イトツ、居た。達郎だア、早く来い」掠れた親父さんの呼声が。「解つた。聞こえたツ」。息子が付いて来ていることを知つていた。

其処だけが平で、北側が空いていた。その空いた所一杯に今朝は、やけに赤く染まつた朝焼けの富士山が、眼についた。

お天気が変わるのかな？何故かふとそんな事を思った。

ケヤキの大木と並んで三

メートル

米程の大岩。その前に「穴」

が空いていた、「ダイナマイト

」(彼が仕事の現場で使っている)。

大岩や木の幹に土と一緒に

赤黒いものが張り付いて

いた。「達チツー！」声は、

まみは、まみは来た時からずつ

と大岩の後ろで腹這っていた。

まみの顎の下には掘り起こし

たと思われる土が盛り上がっ

ている。親父さんが、手で掘り

起こした「頭、達チャンの」。

「キョン」小さい声でまみが、

昨夜、まみがここに隠し吸い込

まれて音にならない。「頭ッ！

達郎の、探せ頭を！」父の振り

かざした手が震えていた。



転するであろう其のとき。

ひとり黙々と手落ちのない

ように、やるべき仕事を 考え

行動する。名犬 まみ。

翌年の夏、まみは彼の後を追うように逝った。

弥一さんは、まみの亡くなった年の秋、「もう今迄のような兎狩りはできないから」と失意の中、鉄砲射ちを止めた。

【第二話・完】

第二話(昭和二十六年頃の話)

花 中型ビーグル犬 牝

終戦から未だ五年余り、日本中、無い物尽くし。人々は、疲弊していた。然し、長い戦争で人が入らなかつた山は、自然豊かで鳥獣たちは程よく殖え、餌も充分有るから、人の世界に越境することは少なく、有害鳥獣捕獲等は里に住むカラス・雀くらい。そんな時代の話です。

私は、二十才になるのを待ちきれないで猟銃や猟犬を支度した。狩猟免許を手にした時、犬は既に半犬(人)前位の猟は出来た。解禁初日から雉の群れを翔び立たせ、下手な鉄砲も数撃ちやり、で雉を一羽獲らせて貰った。犬種はアイリッシュセターらしき犬。未だ大戦後五年余り、当時は、ポインター、セター、ビーグルとは、名ばかり、其の殆んどは「らしき」犬だった。

日を経て、鉄砲射ちが少しは身に付いてきた(自分よがり)二月に入った頃、私の猟と犬の師匠、通称「東山のカズさん」から連絡があった。「明日 鉄砲射ちに行こう、犬は連れて来るな」と。

朝早く自転車に乗って四km、「お天気はいいし風も静か、絶好の狩り日和」。「一人前づら」の一人言を云い乍ら、師匠は又、何か新しい猟方を教えてくれるのかな。師匠の家に着くと、見るからに血統書付と思える毛艶のいい、ビーグルを連れた、五十才位のにこやかな親父さんが居た。ピカピカの二連銃を肩にかけて。今日は、その福太郎さんの「花」のうさぎ犬としての名犬振りを堪能しようとする。

猟場は、箱根山外輪、東山沢(今の富士カントリーゴルフ場)。花が山に入ってから三十分ぐらい、「キヤオオオナー」辺りの空気を突き抜いて透き通った音楽的な吠声、遠吠とも違う初めて聞く犬の声に私は興奮した。「うさぎ起きましたか?」「まだ香り鳴きだ、搜索して寝屋が近くなると嗅いぎ濃くなる、と香り鳴きが始まる。四、五回鳴く頃に寝屋に突き当たる。先つき教えた兎道にタヅマ(射つ為に待つ場所)を張っていない、と福太郎先生。キヤオオオナー、同じ鳴きが数回、突然「ウワオオオナー」吃驚する程のよっかい声、山の気が振動した。よ

く透るでつかい声は、どつちに向いているのか、ウワオオオン、ウワオオオオン、山の奥から「こだま」山びこが返ってくる。連続二度鳴きで向い側の山腹の透けた茅の中を抜けて山頂に向って走る「花」が見えた。ウワオオオン、ウワオオオン、1、鼻を地面に低くして嗅いを取り乍ら走る。顔を上げて空に向ってウワオオンと、何と表現したらいいのか、凄い声量の美声が山じゆうに響いて「花主演」のえらくにぎやかで楽しいショー（獵）の幕があいた。唄声は、小尾根を越えて向い側の沢に移動した。

「花姫」のリズミカルな追唄と、その山びこの交響樂、その又向うの大尾根の舞台上に上ると音程が低くなつた。「ささやく」ように鳴き乍ら、グルグル回り（うさぎも踊らされてか）突如リズムが激しくなり、沢に舞い降り小尾根に跳んだ。山を舞台の「唄のショー」は目下たけなわ、山じゆうが「花姫」の素敵な追鳴きに包まれた。行き場を失つたうさぎは、山裾へ押されてくる。三人の狩人が、このショー（獵）の幕をおろす。大音の大太鼓一発を奏すべく、手ぐすね引いて待っている。と、

桧林の中を茶色の塊が、追唄のリズムに乗せられて一段と高く跳ね上がってピヨッコンピヨッコン、何と！こつちに向って飛んでくる。「大太鼓のバチ」ならぬ、鉄砲を握り締めた。「今日は、先生が二人いる。討ち損ねたら大変」と余計なことが頭をよぎる。心臓がドキドキする。膝もガクガク、銃身を見た。下生の低木が邪魔をする。うさぎは跳ねる。「うまく狙えないッ」。十mぐらいに來たうさぎが私を気取って急停止した。「今を逃しては」、慌てて「ドンッ」。うさぎの頭上を掠めた弾は、向う側の落葉を吹き飛ばした。失中（的を外す事）だ。うさぎは、私に尻を向けて体を低くして全速力で逃げる。「慌てるな、狙え、ねえ」。でも慌てて二の矢をくれた。うさぎが、ころころと回って倒れた（弾が当たったのか？うさぎが弾に当たったのか？）。終演の大太鼓どころじゃない。未熟で「花のショー」に就いて行けなくて、しどろもどろでやつと仕留めた。ややトーンを落とした追声が近づき、うさぎを見て止まると、ゆっくり上を向いて、「オオオンッ」と「終幕」を告げる一声。

そうだ回収に行かなければ。見ると花さんが、うさぎを啜（くわ）えて運んでくる。私の足元に置いた（殆ど）の兎犬は獲物の運搬はしない。若しする犬が居ても、主人以外の人には渡さない。「ヨシヨシご苦労さん」撫でてやろうとすると、花の方から寄り付いて来て、僕チヤンの腿（もも）に抱きついた。下腹を膝の辺りに押しつけて腰を動かし出した。「エッ！何んだよ」足を引込めようとしても、しつかり抱きついて放さない。「動くな、じつとしている」「うさぎを撃ち留めた人、大好き」と抱きついているんだ。嬉しいじゃないか」とカズ師匠。「このことを見せたくてお前を呼んだんだ。運良く自分で経験まで出来てよかったな」。でも「小僧子だった私」にはお父さん方の前で「この状態は」体裁が悪いような（変態）恥ずかしいような。福太郎先生も来た。花は、見て一寸尾っぽを振っただけ。いっそう激しく腰を振った。福太郎先生は、さも満足そうに笑い乍ら「花にそれをやって貰いたくて、都会から老舗（しにせ）の旦那、社長方（が）たが尋ねて来るんだよ。でも運

よく兎がタズマにかかってくれて、射とめなければ「好き好き」は、やって貰えない。「カネ（鉄）の草鞋（わらじ）で探しても見つからない犬だ」とカズ師匠の言葉。

この動作は、牡犬（おす）の子孫繁栄のための時だけのものと思っていなければ、花は、「牝（めす）」なのに牡犬と同じしぐさで好き好きを表現して伝える。そんなことを考え出せる。然も主人だけでなく他人様にまで出来る。仲間意識が特に強い獣獵犬だからから、集りの中の誰がボスか手下か、順位にも（敏感）。

花さんは、小僧子の私を未熟者と承知で「僕チヤン、良く射止めた。偉いね、よしよし抱いてやろ」と私を愛撫してくれたのかも知れない。

名獵犬とは、自主性が強く、我が道を拵（こしら）え乍ら、人とも協調できる犬のこと。

【第三話 完】

第四話（昭和三十八年頃の話）

ゆう太

ドイツポインター 牡

その頃、殆どどの犬は放し飼い。仕事を持つている犬や、番犬以外は、自由に歩き回り、先輩の犬や仲間たちから、他犬との交わり方、人間社会の決まり等を覚えた。柵の中や金網の中に入っている鶏、兎、豚、山羊等の家畜、又それらが冬の田んぼや空き地に放たれていても、追ったり噛んだり、襲うことはしてはならない。畑の作物を踏んで走ってはいけない。それらの事を学びながら育った。

ちなみに山近くの村では、夜になると村中の犬が群れを作って歩き回り、時には山から出て来る狐や猪等を山に追い返していた。人と野生との住み分けの一助にもなっていた。

前の東京五輪（一九六四）を控えて、犬の放し飼いをしてはならぬ事になり、鎖に繋がれるようになった。もう犬同士で世間の仕来たりを学んでくる事はなくなつた。飼い主が、手間暇かけて訓練しても良し悪しを、犬に自分で考えさせることは難しい。

その世間知らずで、然も膨大な運動を必要とする猟犬が、繋がれ

て溜まりに溜まつているところを放せば、喧嘩はするし家畜にもかかる、猫を追って土足で家の中まで駆け上がるはで、やりたい放題となる。

放し飼い時代には改めて教える事もなかった人間社会の常識訓練は、大変な手間仕事になった。そんな時代になつても未だ農家回り、畑回りで猟犬を放しての銃猟は当たり前前の事であり、犬が問題さえ起こさなければ苦情を言われる事もなかった。

この頃になると、猟犬の方は、純血統の鳥犬、獣猟犬が多くなつた。

ゆう太（石原裕次郎の時代）も立派なドイツ・ポインター。ゆう太は、私の弟が初めて仕込んだ鳥猟犬であり、又放し飼いで仕上がつた猟犬としては、最後の犬でもあつた。

私の家は、昔式の農家作り。玄関の戸は九尺幅の重い大戸、閉めた時はその大戸の端っこに付いた潜り戸を出入りする。土間は広くて雨の日は作業場になる。土間の奥は台所。その横の部屋に囲炉裏があつて、回りに座つて食事をした。朝、大戸を開けると暗くなる迄は開けっ放し。犬は、土間か

ら開けっ放しの障子の敷居に顎を乗せて食事が終わるの待つてゐる。時には猫が寄つて行つて、犬の鼻面にパンチを二、三発喰らわせる。「ここは、タマの領分だ」。ゆう太は、認めて黙つて引き下がる。猫が、威張つて奥に戻ると又同じ姿勢で家族の話を聞いて、褒め言葉とかが出ると、話が解つたように一人よがり尾を振つてゐる。母が余り物を集め乍ら「ゆうちゃん、食器持つて来な」。

ゆう太は、待つてました！と吹つ飛んで表庭に行つて、食器のアルミのボールを啜えて来て母に渡す。母は、その食器に残り物と御飯を加えて「ハイよ」と私共の前に置く。私か弟がそれを牛舎の前に持つて行って「よし食べろ」で置いて来る。食べ終わつた器は、そのまま牛舎の前。次も母に言われて食器を啜えて来て渡す。それが毎日の日課だ。

或る日、ゆう太が食器を取りに行つたので、私が持つて行つてやろうと、土間に立つた。何時もなら「もう持つて来たよ」と笑う程早いのに、今日は来ない。庭に出て見るとえらく慌てた様子。ゆう太が、稲藁の小屋から飛び出して来て、いつも猫と寝っ転がつて

いる柿の木の根元を覗き、生垣を抜けて隣の家の戸をガタガタと足でやつてゐる。戸が開いておばあさんの顔が見えた。何か話をしている。人にものを言うように。ゆう太が納得、といった感じ。で、きびすを返すと今度は、上の家（中の家、向いの家等の意）の方に走つて行つた。私も急いで道に出て、上の家へ直行した。上の家の裏木戸から跳び出したゆう太が、自動車を通る（当時とはときたま）表通りの方に跳んで行つた。

辺りは未だ明るくて、正面に見える晩夏の富士の山は青く、夕焼けに染めたいわし雲が空を走る。高原の日暮れは、もう秋真つただ中。

表通りに面した家の手前に観音堂があつてその横の農家の玄関ははあいていた。犬の姿はない。通りのお茶屋さんの前まで行くと、店からゆう太が跳び出して来た。食器を啜えて「おうっ、おうっ、お前！」大声の私を無視して、ゆう太は自分の家に向つて一目散。お茶屋さんに入つて行くと、おばあさんが「あら、訓ちゃん。あの子のこと叱らないでよ。一時間位前に、あの子が食器を持つて入

つて来たのよ。でも未だ御飯食べているから待ってね。あとでお出でよ、と言ったので食器は置いて行つたのよ。未だ御飯上げてないのに大きい声するから持つて行つちやたじやないの、「叱つた訳ではない。これこれ然々です」と私がお店に来た理由を説明した。聞いたおばあさんが「ゆうチャンは春頃、いつだったか、夕御飯が済んで、今日は残り物が多いもつたいないね。いつか来た？あの輝ちゃん(私の弟)の犬、来ないかね」ツて言つたら偶然か呼んだようにお店に入つて来たのよ。こいこいこつちにお出で、食べ残しの御飯やつて。食べ終わつたら、ちゃんとお座りしてじつとみんなの話を聞いて。「アంత、お行儀いいのね。もう上げるものないから又来てね」と言つたら、スツと立ち上がつて帰つた人の言葉も解る。あの子、何て名前かね。今度行つた時間聞いてこよう。

それからゆうチャンは、一ヶ月に二度か三度位は来た。初めの二、三回は、遊びに寄つた感じだったけれど、いつからか食器を持つて来るようになったのよ。初めて食器を持つて来た時、この子何処かからボールを啞えて来ちやつたよ！と手に取つて見たら、ボールの縁が傷だらけ、歯の跡。「若しかして、この子の食器かもね。何か頂戴つて食器持つて来るなんて頭がいいね。可愛いじやない」。「エ、おこんじ(物乞い)していたんだ。近所付き合いで行き来しているのに、早く言つてくれれば良かったのに」、「家族みんなでゆうチャンが来るのを楽しみにしているのよ。止められたくなかつたのよ。それに足繁く来る訳でもないし、叱らないでね。来なくなると寂しいからね」、「ね！」と念押しをされた。

私は、ゆう太のことをとんきょうであわて者、でも何処か可愛い奴と思つてはいたけれど。隣のおばあさんは、戸を叩いたゆう太に人にものを言うように話をしていた。お茶屋のおばあさんは、あの子、と話をすると言つた。恐らく近所の他のお母さん方も、言葉をかければ楽しい反応がある、その行動を心配しなくてもいい子？、気のおけない友のように扱つてくれているものと思える。今日、改めて「対、ゆう太」として一目置く存在となつた。

その頃、お孫さんの居るようになったお母さん方は、今のよう

老人クラブ等もなく、なかなか世間に出て行動したり話し合つたりする機会も少なかった。その上に掃除、洗濯、家中の仕事は総て手仕事。とても忙しかった。

そんな、こんな内に、家業の方、秋の農作業も八割方となり、狩猟が解禁になつた。私はこの頃、夏場は都会のハンター(お客様)の猟犬を預かり、運動、訓練をし、猟期中は猪射ちの猟師の仲間になつて居た。戦後の肉の無い時代は勿論だつたけれど、戦後二十年、とり肉も豚肉も充分になつたこの時代、今度は、高級料理用と買うことで、猪肉は、大層な値で買い取られていた。そんな訳でこの数年、気ままににゆつたりと趣味の猟を楽しむことはなかつた。今日は、久し振りに趣味の鉄砲射ちに戻つて。

肝心のこの話の主役！近所付き合ひでは、人気者の「ゆう太」と雉射ちに、弟が自慢のゆう太の仕事振りを見ることに。

箱根外輪山、東山小塚(今の御殿場アウトレットの辺り)を猟場を選んだ。回りには、山仕事をしている人も見当たらず、それらしき音もない。この山に今居るのは、ゆう太と私だけ。

所々ボサ藪(ブッシュ)混じりの冬の草原を右に暫く行つて、私の進行方向にジグザグに戻つて来る。左側に行つて同じように戻つて来る。鼻を上げてトロット(小走りに走る)で、私が、「あつち行つてこい、こつちも見てこい」と指図する必要はなさそう。

自分で考えて「雉や鶉のつき場(餌場)を次々と切れよく搜索して行く。そのスピード、適切な範囲、一節毎(いちせつごと)こちらを見る、射手(相棒)との「連携も絶妙」。何とも見事な搜索振り。

家で見ると、うっかり者で可愛らしいゆうチャンと同じ奴とは思えない、立派。弟は、ゆう太の生まれ持った素質を十二分に引き出した。此処迄は、百点満点だ。

ゆう太が止まつた。今迄左右に振つていた短い尾っぽが直立した。「認定」。近い所の何処かに獲物が居る臭いを捉えた。因みに、鳥犬は、この時二頭三頭で共猟していても、認定した犬を見るとその犬に向いてストップし同じ姿勢をとる。あとは先に認定した犬の行動に準ずる。どの犬が先でも

同じく本能だ。」

小声で「行けー」。ゆう太は、体を低くして鼻の前に突き出し鳥の臭いに吸い寄せられるように体を低くして、いつ寄り付いたか解らない程に忍び、十数米寄って止まった。四肢を踏ん張り頭を高くもたげて、雉が潜んでいると思われるブツシュを睨み据えるように立った。「ポイントした」と狩猟者は言う。

ゆう太の鼻頭がかすかに左右に動く。複数の雉が潜んでいるのかも？、ピリッとゆう太の気迫が伝わってくる。迫力充分。

この時迫力不足だと鳥はブツシュの中を這って逃げて、散弾の射程距離（五十米位）を越えて飛び立つ率が多くなる。次の度に、「ゴー」とか「ヨシッ」を何度言っても鳥の潜むブツシュに向ってダッシュ出来ない（緊張し過ぎの）犬も同じ、逃げられて終わる。

ゆう太は、猟師が思い描く教科書通りだ。私も散弾銃の安全栓をはずし、ゆう太の後ろ、五米位の所に静かに寄って立った。犬の気が熟すのを待つ。

鳥射ちハンター。至福のひとつだ。

しかし、飛鳥を射ち落とすことには、そう簡単ではない。野生は、人には考え及ばない程の勘が働く。空に舞い上がってもハンターの射る眼光を感受して木竹の盾にその影を翔んだり、急降下急旋回等をして身を守る術を考ずる。

ゆう太の短い尾がブルツと動いた。「ゴーッ」、一気にブツシュに飛び込んだ。パタパタパタッパタッ、激しい羽音。赤い頬っぺ、ビロードの首をもたげてクルリツと周りを見ながら（状況判断）牡雉が舞い上がった。銃を肩につけた。とゆう太が素早く右横に一つ跳び、古茅の根株に頭から突っ込んだ。「えーッそっちからも出るッ！」。瞬時、そっちに眼がいった、気もとられた。「待てよ」先輩方にいつも言われている。二兎を追う者はくさだ。先ずは先のものに集中。邪魔な木もなく横つ跳びの方からも何も出ない。

「慌てないッ。もう一秒、矢先（弾丸の行先）は大丈夫か、危険はないかも見て、狙って！」。ドンッ！。羽ばたきが止まって、スト

ーンと雑巾落とし。綺麗な引用ではないけれど飛鳥射ち猟師はそう言う。

弟からゆう太のことは話には聞いていたけれど、この子と初めて猟をした私。普通の鳥犬の場合なら複数の鳥が居るとき、初めの鳥が飛び立ち、銃声がすると興奮して、そのまま走り回って弾込めの間もなく次々追い出してしまおう。

ボサから顔を上げたゆう太が反対側に向いて立ち止まっている。「持つてこいよ」。ゆう太は、私の眼を、押さえるようにグッと見た。犬が自らの考えで仕事をこなしているのに、じっと待つことが出来ずに、従わせようとする私。私が、世話を焼く場ではない。

ゆう太は、その場で急に頭を低くして「認定」の姿勢をとった。「そうだった。初めのポイントのとき、複数の雉が居る動作を示した。御免ッ、待ってくれ」。中折式二連銃の今発砲した薬きょうを込め代えた。「ヨシ行け」。私の前を忍んで、先程の横つ飛びとは反対側十米位の茅藪の手前で

止まって、踏ん張った。ポイントした。群鳥捌き（群れで居る雉科の鳥を一羽づつ仕分けて、号令毎に順次翔たす技）だ。群鳥捌きは天性のもの、仕込むことは、不可能。（銃声が嫌いだからから二次的に偶然出来上がった？）いや、私の屁理屈はいらない。ゆう太がもって生まれた才能だ。

ゆう太の尾っぽがピリッピリッ又ピリッ。一羽目との間に私が余計な時間をかけたので、雉に動く隙を与えたか？。「ゴーッ」跳び込んだ。出ない。顔を上げて先を見た。大きくもう一と跳び。奥の茅草から雉が舞い出た。ゆう太は忙しい。発砲する前にまた枯草の中に頭から突っ込んだ。「ダンッ」。雉は、横転しながら笹藪に落ちた。私は、今度は黙って待った。でもゆう太は、次の行動に移らない。次はもう居ないから。ゆう太は前足で頭を抱えるようにしてお尻を持ち上げて「頭隠して尻隠さず」の態だ。「ゆうちゃんッおわりか？」。声をかけても反応がない。傍に行ってお尻を軽く叩いて「おいッ大丈夫か」。おもむろに顔を上げて、すつとぼけた表情でキョロキョロ。腹の底から吹き上がって来

る可笑しき。おまけ付きの名技だ。

その猟芸に何とか相棒が勤まったことも、ただ嬉しい。これが失中して、ドカンッドカン、尚ドカンッとむやみに轟音を立てるとこの猟犬は壊れるかもしくはない。

常に冷静で心を通わせられる射手との共演で結果が成る。『猟犬の名技』とは極めて繊細なものへと重ねて思った。

全ての猟犬は、煙火を使つて爆発音に馴らす訓練はしておく。それでもシャイ（神経質）な犬が、初めての銃猟で、不用意な連射に驚いて逃げてしまう（怖い主人の傍は嫌い）。『銃癖』になる犬は少なくない。その殆どの犬は、治らない。

ゆう太が動いた。後で撃つた雉の方に直行（横転は、片羽根折れ（半矢）で走り逃げるかも）。

私は、銃から残弾を抜いて足元に置いた。羽根の上（獲物の肉を歯で傷めない）。中には腹わたがとび出す程強く喰えて持つて来る犬等様々）から啞え此方に向つてくるゆう太が急に避けるように位置を変えた！？。『免』、筒

先が向いていた。反則だ。急いで銃口をうしろに向けた。脱包してあつても銃口を人に向けてはならない。これは、銃を取り扱う者のルールだ。

猟犬達も銃口が向いた先で何が起きるか、を知っている。

言い訳のようだけれど、元来、牛馬犬猫等の家畜は、命令をして従わせるものと私は思っていた。

小学校五年生の時、三島市の現在日本大学、高校の所に陸軍砲兵連

隊の兵舎が、銀杏並木を挟んで税務署の方側に練兵場があった。その練兵場で、馬に跨った父が真ん中で号令をかけ、その周りを十数人の若い兵隊さんが、それぞれ馬に乗ってぐるぐる回ったり、一斉に回れ右をしたりしていた。その内一人の兵隊さんが、落馬した。でも馬は、乗り手が居なくても列を崩すことなく他の乗馬と同様に走っていた。

訓練が終わり兵舎の面会室に移った。父が言った。「新兵が号令を間違えても、訓練された馬は間違えない。兵は右回りと思つたのに、馬は号令通りに左に回つたから平衡を失つて落ちた」。

これがわたしの対×家畜の原点

だ。名犬の仕上がるこのない原点で威張ることもないが。

しかし、それから相棒（犬）と心を分かち合える。『弟』の仕上げた猟犬は、どれも周りの狩猟者の誰の犬よりも秀れていた。

自分の考え、自分のキャラで人を友に出来る名犬ゆう太。天性の猟芸を引き出し、偶然とは言えおまけ付きの名技、その壊れ易いおまけを壊さないように続けさせられる……

輝ちゃんも、名人と言えるかもしれない。



私の弟（輝ちゃん）は、令和二年にこの世を去りました。八十才を越えても使っていた猪猟犬も当時（六十年前）と変わらない抜群の猟技の猟犬に仕込み・育て上げていました。

【第四話 完】

第五話（昭和四十年後半頃の話） 主を尋ねて（風のハリ）

ハリー 英ポインター 牡

伊豆下賀茂温泉の海側、弓ヶ浜にある不動産会社の仮事務所を出て、海沿いの国道を走つて石廊崎を廻つて駿河湾側、雲見港入口の1km位手前で車を止めた。山側に大きく売地の看板。その土地を見るべく上司二人が、道路を渡つた。私は、一足遅れて車のドアを閉めた。その海側の路肩を白茶ブチのポインター、見るからに英ポインターらしい惚れ惚れする体系の犬、が足早に近付いて来た。私の後ろにも山側の丘にも飼い主らしい人は誰も見当たらない。猟期には未だ早い。首輪に十センチ位で千切つたビニール紐が二、三本ぶら下がっている。此奴、度々喰い千切つて走り回っているのかな？。私と眼が合った。避ける様子もなく膝元を掠めて通り過ぎた。「オイッ待てよ」。奴は、足を止めて振り返った。「パンをやるから来いよ」。奴は、ごく当たり前のように戻つて寄つて来た。人を恐れない、野良犬ではない。車のドアを開けてパンを差し出

すと、一息に飲み込みながらサツサと出かけた。「腹が減っているのか？待てッ」。五メートルばかり行つた奴が、振り返つた。「もどれ。もう一ツやる」。言葉（待て、もどれ等）に対する反応がいろいろ、これは、仕上がった獵犬だ。

何処から来たのか、この辺りには別荘も見当たらない。一番近くても雲見の漁村、二kmはある。田舎だから放し飼いにしてあるのかも。二つ目のパンを飲み込むと無愛想だけれど尻尾を一振り、

私の腿の辺りを嗅ぎながら上眼遣いに私と眼を合わせた。何故かしつかり見た、何かを納得したように。

私も惹かれてその解らない何かに「ウンウン」と。

彼は、石廊崎の方に駆けて行つた。予定の仕事を決ませて弓ヶ浜の事務所に戻つた。事務所の入り口横にこの獵期に備えて新しい犬小舎を置いてある。社長も獵をやるので、獵期には私の鳥犬を連れて来て繋ぐ予定で・・・、その犬小舎に白茶の英ポインターが繋がつていて「エーッ、社長、犬を買つたー、いやこりゃー雲見のあの犬だ」。社長が「あそこから三

十km近くある。それを既に来ている？。それは、無理だろう」。そう言われれば、途中人家はいっぱいある。その上、此処は彼が駆けていた国道の道端ではない、入り込んだ住宅地の真ん中。然も国道の向こう側は温泉街、旅館からご馳走の匂いがプンプンしている、と、色々否定的に考えてみても矢張り雲見の犬だ。首輪に十cm位で喰い千切つたビニール紐が二、三本ついている。良く絞れた身体。獵野系ポインター（品評会系、競技会系等）の看板のような男。「どうする」と言っているようなもの言う、あの眼」。

私は、副業として獵犬の訓練士もして来た。獵犬についてはプロだ。首輪など無くとも間違えることとはない。納得した社長が「勝ちヤン、貴方は明後日には書類を持って本社へ戻つて貰う。その時、遠回りだけけれどこれを雲見まで連れて行つてやれば」。

然しこれの家が雲見かどうかは解らない。石廊崎を廻れば三十km。でもパンを食つた所から少し行つて山側に入り、天神原から横に切れて青野川に沿つて下れば十五kmそこそこで下賀茂温泉を通つて此処に来る。とすると何処

の犬？、南伊豆？松崎？下田？か。これだけのいい男だ。鳥射ちハンターなら誰でも声をかけたくなるオーラもある。脚力に任せて半島中を走り回っているのかも知れない。

自分の足で来たのだから、此処で放すことがベストかも。それが良からう、然し偶然にしろ、縁にしる、何十kmも先で合つただけの人が戻る所へ、先に来ているという不可思議な奴だ。夕飯を御馳走してやつてから放せば」と社長。夕食を与えて、鎖を外した。

私も食事を済ませて出て見ると、餌は食べて終わつたけれど寝ていた、小舎の中で。「オイッ、放してあるぞ。そうか今日は沢山走つて来て疲れたのか」。のそつと小舎から出て据つた。「お前、家に帰れ、行け」。彼は首を傾けて私を見たり。「なぜ」と言っている。

でもこれ程の英ポに飼い主が居ないと言うことは考えられない。そう言う結論に達した以上留めて置く訳にもいかない。「まあゆつくり休んでからでもいいよ」。

部屋で明日の仕事の打ち合わせを済ませて覗いて見た。彼は居なかつた、帰つたか。おかしな奴だったな、此処に居

たかつたのかな。あの眼は「居ては駄目か」と、迷い犬かな？、いやそれは私の思い込みだ。

それから二日目の夜九時頃、富士山麓の我が家に帰つた。「日暮れ時に輝さん（私の弟）から電話がありましたよ」と女房が言つた。弟に電話を入れると「夕方、犬どもが大騒ぎをするので、庭先に出てみると英ポが居た。よく絞れた格好のいい牡犬だ。帰れ、行け、と言つても俺の顔を見ていて動かない。家の犬どもは大声で吠える。隣家に迷惑だから（田んぼの中に二軒だけ）、車庫に繋いで置いたけれど、こんな英ポは見かけない。兄貴が見れば解るんじゃないかと思つて、今帰つたんじや疲れているだろうから、明日でいいから見ておいてくれ。エルフェー系の素晴らしい奴だ」。むっ！まさか？、あそこから百km余りある。

雲見でパンを喰えたときの眼、声をかけた私の帰る所が解つていたように先に行つている、と言ふ凄まじい感覚。数十kmを一つ飛び、鍛え上げた体力。弓ヶ浜で「家に帰れ」と言つた時の「何か考え中のあの眼」。もしかしてあの靈感

とも言える抜群の感度、ハリケーンのようなスピード、犬だけで百km余りを主人でもない人の家を尋ねて先回り、彼なら出来るかも。

「その犬は、首輪に古いビニール紐の結び瘤（一昨夜ぶら下がっている分は切った）がいくつあるか？」「あつたよ。兄い、知っていたのか。誰の犬だネ」。吃驚どころじゃない。恐ろしくなつた。

勝手知つた者が、車で主要道路を直行して百km余りだ。何処を通つて来たのか、弟の家も私の家も主要道路から一km位は離れている。やっぱ無理だ。別の犬が、偶然似た状態の犬が、来たに違いない。「今、見に行くよ」。田んぼの中の道、私の車（弓ヶ浜でも乗っていた）、ジープのエンジンの音を彼なら覚えてる筈。犬は音感もいい。弟の犬達も知っている。ボスが来る音だから夜でも吠えない。車庫の前で停めた。弟も出て来た。

「紛れもなく彼」、鳥肌が立った。私を見てお尻まで動かして、尻尾を振った。「兄貴を見てこんなに喜ぶ。兄貴が預かっている犬だったのかね。」「いや、誰の犬で

もない。此奴は、一昨日の夜、弓ヶ浜の事務所を出た」「伊豆で飼っていたのか!? 何故、俺の所へ先に来るんだ? 兄貴は、これを連れて会社へは戻っていたのか?。それにしてもいい犬だな。運動も行き届いて良く絞れている。運良く俺の所に逃げ込んで来たんで、よかつたな。」

困つたな、そう言うことではない。「私は、事務所には寄らないで直接家に帰つて来た。」

これこれ然々と一昨日から起きたこの犬のことを話した。

「解つた」と疑うこともなく弟は納得して話出した。

結論から言えば、今のこれには、飼い主は居ない。思うに、旅慣れていて、恐らく以前にも此の辺りを通つたか、住んだか、兄貴の所も俺の所も常時いくつもの猟犬が居るから、若しかしたら知らない間に幾度か来ていて、臭いも場所も覚えていた、だから長距離を難なく直行して来た。兄弟の臭いは、同じ群。自立している犬にすれば、思い立ったことを即実行しただけかもしれない。と。彼らしい努力をして、今猟期の

狩りの相方は出来たし、繋がれて餌も食べた。

雲見からのことを思い返せば、以前から私のことと言うか、臭いと言いつのかわ知っていたとすれば、一昨日からの出来事は繋がる。弟の言うことは、一にも二にも領ける。

彼は、得心したように私の眼をじいつと見て「〜」と、私もそう言うことか「ウンウン」と

「俺は、この犬に興味を沸いた。

早く慣らして山に引いて見たい。猟犬として役立つかは、猟期になって鳥を射ち落として見なければ解らない。射落とした獲物を滅茶滅茶に噛み砕いてしまふか、小寿鶏や鶉のようなものは、丸飲みにして終う奴もいる。食いたいから頑張る（一見、働きの見える）。段々と食欲が昂じて、自分で捉えていると勘違い。主人そつちのけで、セルフハンディン（一人猟）。挙句の果てに、逆に犬が、主人を捨てて野犬になる犬もいる。駄目犬でも一度飼つてしまった以上また野犬に戻すことは許されない（迷い犬を飼う場合

は、「私が預かります」と警察へ届け出なければならぬ。迷い犬を試し飼いはすることは賭けた。狩猟が解禁になつた。あの風のような彼は、「ハリー」と呼ばれて、鳥猟犬としての評価は、上部。気合の入つた切れのいい仕事をする。運搬も良し。難は、歯が硬い。けれど獲物が壊れる程のものではない。あの馬力と根性だ、その程度は当たり前かもしれない。

ハリーは、弟の友達で近くに工場を持つA氏が「迷い犬」（警察を通じて元の持ち主が現れた時は、返さなければならぬ）承知で、今猟期だけ引く事になった。「ハリーがいい仕事してくれるので、親会社の社長が、喜んで日曜日毎猟に来る。ハリーは、うちの会社の功労者だ」。

しかし、A氏の飼い方は、野放図だ。度々弟の所や私の家に遊びに来る。「終猟になつたら即連れて来た方がいいよ。」と弟に言った。弟が、A氏に繋いで置くようにと言つた所、「週に一度しか山に引かないから、たまには運動をと思つて放したけれど。解つた、繋いで置くよ」。でも相も変わらずであった。A氏に見れば猟

犬も研磨機も同じ、必要な時の道具でしかなかったのかも知れない。

猟で山中走り回っていた猟犬に、えらく退屈な春が来た。猟期が終わった。

それから一週間、春の嵐の吹き捲っている日、風の名犬は消えた。想像するに、元は沢山の仲間が居る繁殖犬舎で産まれた。腕の確かな田舎の猟師のところに行き、放し飼いで自由に走り回りながら育てられ、自ら考えて捜索するいい犬に仕上がった。

はるか遠い大都会から来た老舗の若旦那に惚れられて引き取られた。若旦那は勿論、その大勢の使用人に可愛がられ、みんな仲間「群」と思って日々を過ごしていた。

初猟には、鶉の渡りの大群が通過する富士山麓の大野原へ、足繁く出猟した。赤山鳥を射ちに伊豆半島へも度々出掛けた。

二年三年過ぎた或る猟行中、何らかの理由で主人とはぐれた。それから彼の長く厳しい旅が始まった。

主を尋ねて幾歲月。春になったら主家を見つける旅に出て、秋

風が吹く頃になると猟犬なりの血が騒ぎ、努力をして、腕の立つ猟師を見つけて、草鞋わらじを脱いで

疾風はやての如く現れて、嵐と共に消えた。

烈しくも、どこか寂しい風の迷犬めいけん(名犬)。あのもの言う眼が、主を捉とらまえる日は

【第五話 完】

猟犬物語 番外編

番外編

昭和四〇年代の話

猟犬と学んだ野生の習性

真冬の或る晴れた日、お茶屋大野園の親父さん、元、猪猟しりようグループのリーダーと雉射ちに出かけた。

沼田山の炭窯すみがまの所まで行くと向いの尾根から「キャンーキャンー」と獣を追っていると

える犬の追い鳴きが、こつちに向って追い下げてくる。追い犬の邪魔をしないように、私の鳥犬(アイリツシュ・セター)は、引綱ひきづなに繋いだ。

「聞きなれない犬の声だが、誰の兎犬うさぎいぬかな?」。先輩方は誰もが追鳴きを聞いただけで、誰その犬だと持ち主が解るのに。これは、はぐれ犬と言うか山住やまずみの犬だよ」と炭窯のおじいさんが、あの犬のことを話した。

あいつは、去年の秋、冷たい風の吹く朝、窯かまどの前で寝ていた。わしが近付いても恐れる様子もない。他人を恐れないのは猟犬だから?。でも今迄この辺りに来る猟師が連れて来たことのない犬。「何処から迷って来たのかな? 腹が減っているだろう。これを食

べな」。窯かまどの前の焚火たきびで焼いたさつま芋をやった。

あいつは、尾も振らず食い終わると何のお愛想もなく急に何かを思いついたように行つてしまった。帰ったのかな? 可笑おかしな奴だ、と二日ばかりして又寝ていた。「家が見つからなかったのか?」。手を出すと、スルツと避ける。

人様ひとさまには触らせない、尾も振らない。これでは、街の人には餌は貰えない。「三日も食わずに、さぞ腹が減つたろう。山だから何にもないよ」。にぎり飯とさつま芋を大ドンブリに入れてやった。

あれは、尾つぼも振らず、さつま芋を一欠片食つただけで遠慮したように行つてしまった。「何だあれは? どんぶりを見ると家も思い出すのかな。それとも腹は減っていないのかな?」。

暫くすると、キューンキャオン、と犬の鳴き声が近付いて来て、すぐ其処そこの窯の上側の「兎の国道」、その獣道を兎がピョンピョン跳んで来て、その後をあれがわしの方を横目で見ながらキャオンと声を張り上げて通つた。腹をすかしているかは憶測だけれど、何を考えてウサギを追っているのか、変な奴だ。

(兎も猪も鹿も、追われると山の流れに乗って逃げる。上下左右から小尾根、小沢が寄り集まっている所、何処から走つて来ても其処に来てしまう)。

炭窯のおじいさんも伐り倒した炭の原木を集めるのに、どの小尾根、どの小沢を引き摺り降ろし

ても、同じ此の場所に来る。其処に窠を築く。

其処は、自然を相手に生きるもの、炭焼き、きの子栽培、林業の起点であり、野生鳥野生鳥獣達の日々のくらしの往還である。因みに鉄砲射ちも、犬に追われて来る獲物を待つ場所(タズマ)に古い窠跡を選ぶ。)

周囲の山で一時間分程追い鳴きが聞こえた。それから三〇分余り、わたしは、水汲みに行った。水場まで約三〇m、途中の栗の木の前根元に兎の毛が沢山混じった糞があった。狸にしては大きい昨日は、気が付かなかった。このところ猟犬も見ない。もしやあれの糞?、奴が兎を捉まえて喰った?

そこへあれが戻って来た。大きな兎を横啜えにして引き摺るように運んで来た。わしの前に投げ出すように置くと、竹筒の水管から流れ落ちた水たまりに腹這いになって齧りつくように水を飲んだ。わしが水を汲みながら「お前、兎を喰いに山へ来るのか?、飼い主は鉄砲射ちじゃないのか?」。今現在、猟期中、猟犬もひとり猟”には来ない。わしが

ヤカンをぶらさげて小屋の前に戻ると、あれが兎を啜えて来て小屋の前に置いて、先程食い残したドンブリのにぎり飯とさつま芋をガツガツ食って、無愛想のままに、窠の前で四肢を伸ばして寝てしまった、満足そうに。兎は、あれがいつでも持って行けるように、小屋の前のグミの木の下枝に掛けておいた。次の日の朝、キヤオンウオンとあれの追い声で眼を醒ました。

今朝は、炭窠の煙の色が調度好くなったので「火焚口」をいっぱい空けて窠の中の「熱量」を一気に上げて、夕方には粘土で空気の入る所は総て塞ぎ、窠止め。ばあさんも来て布団を乾かしたり小屋の中のそうじをしたりで大忙し。午後になっても昨日掴まえた兎は、そのまま。下の山で朝から追い回していたあれは、それきり音沙汰なし。「昨日捕った兎があるのに・・」とばあさんが「別の兎を追っているという事は、此処にある兎、いらぬんじやないの?、じいちゃんが御飯やったからお返しのもりじやないの、せっかくだから貰って行こうよ」、で荷物を背負って山を下りた。七日程して、小屋に戻る事とな

る。窠から焼けた炭を出して、冷やして、鋸で切り揃えて炭袋に詰めたり、秤で量ったり色々手間が掛かる。ばあさんも大きな荷物を背負子に括りつけて山に登った。途中まで登ると、あれが、あんなに無愛想なあれがとんで来て、さも嬉しそうに「ワンツ!」と、炭小屋で長年飼っていた犬が気配を感じてすつ飛び上って迎えに来た、何だか前にもこんな事あったような・・、そんな錯覚に陥る、人の気持ちの中に押し込んで来る。そんなオーラを持っている、小憎い奴だ。

ばあさんが、小屋の掃除。今迄は留守の間にネズミが小屋中を噛み荒らすのに、今回は荒らし方が少なかった。布団も陽に乾かしたり、お釜で二人一匹分のご飯を炊いたり、「そろそろお昼ご飯にしたいけれど、あの子がいないネ」。

ご飯食べながら「あれには、今は飼い主は居ない。此処が気に入って住み着いたけれど、元の飼い主を見つけない間は、一時凌ぎかも、山住みでも活きられる犬だ。その内、気が変わって何処か行ってしまおうと思うよ」。「あの子が居れば野ネズミも近寄らないし、何より

夜、じいさんが山に一人じゃなくなる。居た方が好いんじやないの、「ウン、まあ飼うつもりはないけれど今のところ成り行きに任せるよりない」。あれが居ると此の周りの兎が捉えられて居なくなる。

春、炭木に切った切株から芽吹く新芽を食う兎が居なくなることは望ましく思うけれど、そうばかりとも言えない。兎が食うのは雑木の芽だけではない。若木が育つ邪魔をする蔓草や茅草の芽も食ってくれる「食物連鎖」だ。動物も植物もお互い助け合って生きる。その中の一種でもいなくなる又は殖え過ぎると、「自然」は成り立たなくなる。

兎を捕り放題にして置く訳にはいかない。仮にわしが鑑札(狩猟免許)を持っていたとしても、わしの所の犬が、周辺の兎を獲り尽くす程捕っている、然も一年中となれば、この辺りに来る猟師にも申し訳が立たない。山の鳥や獣は「無主物」と言ってわしの山に住んで居てもわしのものである。それは、みんなのもの。税金を払わなければ捕獲する事は出来ない。そこへあれが、兎を啜えて帰っ

て来た。いつも通り、グミの木の
下に置くと、先程ばあさんが盛つ
た大ドンブリのご飯をパクパク
喰つて、今朝迎えに来た時のさま
は何処へやら、例の如く無愛想に、
薪置き場の寝床に潜り込んでし
まった。

「あの子は、働き者だネ。ネズ
ミ捕りはするし私達の食べる肉
も捉えて来てくれる。此処に来る
鉄砲射ちさんもみんな友達じゃ
ないの。腰かけてお茶飲んで、お
じいさんと話をしてく、あの子の
事で苦情は言わないと思います
よ」。「そう言う人ばかりとは言え
ない。炭小屋で飼っている犬は、
常時兎を獲つて小屋に運んで来
る（獵期外は違法）となると、
誰も口には出さなくとも気分は
良くない。この辺りに来る獵師の
足は遠くなる。

仮に鎖に繋ぐことが出来て飼
つたとしても、自己主張が強く利
口で、生きる為には人でも利用出
来る犬だ。現に朝、あれ程喜んで
も、わしが、「嬉しいか、よしよし」
と手を出せば、スルツと避ける。
兎を捉える体力だつて今から二
年三年が精一杯。その点、鉄砲射
ちは居なくなる事はない。
そんなこんなであれの事を「さ
ん（山）」と呼んで二ヶ月でも

今だにあれば身体に触らせない。
だから繋いだ事もない。多分わし
が小屋を降りてもついて来る事
もない。「今、伐り始めている木を
焼き終わつたら、春の田圃の仕事
が始まる。炭小屋は閉めて、秋に
稲が片付く迄は此処に来る事は
ない。半年もの間、さんを小屋に
置いて行く訳にはいかない。」
さんが此処に居ついてから
色々あつて、ばあさん共々それは
それで楽しかったけれど、今後の
さんの事を考えると簡単な問題
ではないと。

さんの話で時間が過ぎて、鳥射
ちは、お仕舞。結論として大野園
の親方が獵犬として飼う事に決
まった。「掴まるかどうかは確約
出来ないけれどやってみよう」

「首輪と鎖は、何日か繋がねばと
思つて支度はしてある」と言い
ながらも、じいさんの複雑な表情、
働き者のさんの事が気に入って
いる、可愛くもある。しかし、規
則決まりの人类社会で生活させる
には自由過ぎる、さん。長年、
猪獵犬と言う「野生を超える仕
事」をさせる犬を何十頭も仕上
げて来た親方のところなら納ま
るかも。

でも安堵する前に涙のでそうな、
寂しそうなじいさんが、私的には
可愛そう。大野園の親方とは言
え、そこは商人、「今までの餌代
その他掛かった費用、掴まえる手
間賃等それなりの手当は払うか
ら、掴まえたら店の方へ連絡を頼
む」。

野生の子供たちは仔と言えど
もそう簡単に犬や肉食動物の餌
食にはならない。野生鳥獣の持っ
て生まれた防衛本能等、私が永年
獵犬と経験した事を。

青草が繁つた頃、兎犬を連れて山
を歩いてる時、搜索中（鼻を低
くして兎の新しい臭いを見つけ
るべく走り回る）の犬が、仔兎を
踏み起こした。手の平に乗る程の
生まれてまだ数日の仔兎。

犬が、気配？を感じてか鼻を地
にこすりつけて「ごそごそと、あと
一足で仔兎の潜む葉っぱを踏み
つける瞬間、」シュツと一尺「
仔兎が滑るように跳んだ。この「
一尺」が身を守る微妙な距離。

犬は、視野の角っこを掠めた小者
の行先目掛けて飛びついた「三
尺」、仔兎の潜り込んだ葉草を飛
び越えて鼻を土にこすりながら、
その先を五尺、十尺その後を追う
ように仔兎がシュシュ、五尺で

「潜む」。犬は、グルグル回つて
初め仔兎が跳んだ辺りを慎重に
嗅いで「臭わない？」。頭をもたげ
てキョロキョロ「なんだつたのか
な？」。ブルツと身震いをしてク
シュンと諦めた。

兎は、歳若い時ほど臭いが薄く、
生まれて二、三ヶ月は全く臭わな
い？と思える。

因みに飼う兎（当時は農家で肉
用に）の元は、ヨーロッパの野兎、
土に穴を掘つて出産、仔兎は一日
一回か二回程授乳する穴兎。日本
の野兎は、草原で出産、生まれて
初めての授乳が済むと、仔兎は四
方に分散して草の中へ、母兎は
離れた山に移動する。「親兎は臭
うから」。五日、六日すると母兎
が、乳を飲ませに現れる。三回か
四回授乳すると仔兎は、乳離れ、
一人立ちする。そう言う事で、
半年一年と歳を重ねる程に「体
臭は濃くなる」。大人になる程、
犬は追い易く、歳をとつた兎程狩
られる事になる。

鹿の仔も同様、産まれて暫くは
敵が来ると茅株の蔭、倒木の下等
に隠れてじつと動かない。犬が傍
らを通つても臭いが無いから大
丈夫。母鹿が足踏みをして犬の気
を引くのに釣られて、母鹿を追っ
て行ってしまう。

草食獣だけではない。空を翔ぶことの少ない、地上に営巢する「雉科」の鳥の雛も匂わない。或る日、水の流れていない小沢の中州で「赤山鳥」の雌鶏めんどりが巢籠ねごつているところを見つけた。近付くと母鳥がこちらに向って飛び出し、片羽根を引き摺ずつて「擬態」（怪我をした振り）バタバタ、犬が釣られて追う。母鳥は、犬を誘つて小尾根を越えて向こう側へ。急に親鳥が翔び立つと腹の下に居た雛達は、本能的に八方へ跳び散る。数十センチ忍者のように消える。枯れ枝、枯草を重ねた巢の傍らにしゃがみ込んで雛が消えた辺りをじつと見ている。

落葉が息をしている、隙間からそつと覗くと、あお向けで葉っぱを掴んでいるチビツ子が指でチョンとつくと瞬時に数十センチく又消える。敵が若しそこに居たとしても臭わないから鼻が頼りの肉食獣には捉え難い。孵化して一昼夜も経てば、巢は捨てて親鳥について餌を貰いながらテリトリー（生活圏内）を走り回る。翔い上れるようになる迄は忍者が続く。犬を撒いた母鳥が舞い戻つて来た。自然界は何とも「妙」である。

炭窯での話し合いの日から二ヶ月余り猟期も終わり、久し振りに大野園に出掛けて行った。車の出入り口から入って裏へ、裏のお茶工場の前に、さんが寝転んでいた。鎖に繋がつて、隣に今は隠居犬、親方が仕込んだ最後の猪犬ししぬポチが頭を並べて寝そべっている。自己主張の強い似た者同志、いい雰囲気、流石はプロ。

親方「部屋に入れ」。

普通の猟犬なら余所よそから連れて来て十日も慣らせば充分猟に引ける。しかし相手が相手だから一ヶ月近く特別待遇で可愛がつた。終猟が近いのでそれ以上は待てない。

沼田山のじいさんの炭小屋より一尾根手前の山裾からさんを放した。案の定、あれは一目散に炭小屋の方向に吹っ飛んだ。わしは、炭小屋に登る粗朶道の入り口までゆっくり行つた、二十分位。その間に成るようになる（答えが出る）。

永年、沢山の犬を扱つて来た上での行動。予定の所まで来た。チョッキの胸の弾差しからカラの葉莖を抜き取つて口に当て「ピピー」、さんと呼んだ。暫く待つた。山は静かだ。「成ると

思つたが、そうはいかなかつたか。又、元からやり直しか。土手の切株を見て「腰でもおろすか」とその時、粗朶道を斜めに突つ切つてえらいスピードで足音も立てずに、先程放された方角に、さんが跳んで行く。「お！さあッ」、さんが向きを替えてボスの所へ頭を下げてすまなさそうに、もしかして、じいさんは居なかつたか？。

そこから小尾根の裾を二沢ふたばかり、荒らした山畑の端から起した兎を小一時間追わせて、中腹の横道でタズマにかけた（射止めた）。一ツ獲ればよし。

その横道は炭窯に繋がる。小屋に近付いたが、さんは、わしから離れない。「やはりじいさんは居なかつたんだな」。積み上げた柵木の蔭からじいさんが「やあくさつき、これが跳び込んで来た。お前逃げて来たのか」、振つた事のない尾っぽを振って、（内心は嬉しかった、忘れてなかつた。と。）「ここは、もうお前の家ではない。帰んなッ行けッ」と言つたら、尾っぽを下げて、でも走つて帰つた。「エー解つたのかな、大丈夫帰つたのかな」。暫くして向こうの山で聞き馴

れた、さんの追い鳴きが始まつた。やっぱり駄目か。兎を捉まえて来てわしの機嫌を取るつもりか、そう思つていたら鉄砲の音がして追い鳴きが止んだ。大野園が連れて来たんだ。良かった良かった。ここへ寄つて貰いたいが、寄らないだろうな、と思つていた。「寄つてくれてありがとう」。あの時から犬小屋に繋いで一ヶ月。放したのは今日が初めて。この山を選んだのは、ここならどこかへ行ってしまふ心配がない。内田さん（じいさんの氏）の所へ行くに決まつている。それは、想定の内。しかしその後、離れる時素直にわしについて来るか、試して見たくて寄せて貰つたのですよ。炭小屋の方が良ければいつかは自由になるべく行動を起こす。さんは、思い切りが付いたのか、つけようと努力をしてか、ボスはこつちだ、と自分に言い聞かしているようにわしの膝脇に張り付いて、振り向かずにく小屋を後にした。内田さんに申し訳ない程に、じいさんもさんを見ないようように上を向いて大きく息をした。それから次の日も、その次の日も別の山で猟をした。兎を一羽獲れば終わりにする。自分で兎を捉まえる気配はない。立派な声では

ないけれど、良く鳴いて良く追う。追うスピードは、かなり速い。兎が足を止めてゆっくり考ええる間を与えないから、タズマに掛かる率もいい。

四日目に、さんの鳴き声が急に激しくなったので「捉まえるのかな」と、声の方に気をとられて、全速で足元に来た兎を、慌てて、ドンツ、打ち損ねた。鼻を低くして足臭を確実に追って来たさんが、火薬の匂いのするところまで来ると、ぐるぐる回って兎が転がって居ない事を確かめると、鼻を上げて追い鳴きも止めて「全力疾走」。

これだ、この犬は、元々は誰かが仕込んだ兎犬だ。それが証拠に昨日、さんが搜索中に、わしの前から兎が跳び出した、兎は直線に跳んで、直角に曲がって、わしから三〇メートル位離れた辺りで射止めた。銃声がすると、さんが吹っ飛んで来て「何か転ばったア」とわしの足元に来た。

兎の走った跡を嗅ぐのではなく「弾丸のとんだところを一直線に行つて」兎が矢を食った辺りから臭線に乗って五、六メートル、兎を噛んだ。火薬の匂いを辿る事を知っている。もちろん、銃声が何を意味するかも。

自主性が強すぎて主人は相棒、その相棒が撃ち損ねたから俺の番、超俊足で音を立てずに走る。他犬に出来ない何千、何万の犬の中の一犬。彼の特技だ。

さんが追鳴無で行つてから三〇分位、タズマを移動、下の畑に見える場所に立った。

荒らし畑の枯草の中、さんが身を沈めるように忍んでいる。突如大きく跳躍した。「チイッチイッ」兎の悲鳴。荒らし畑に降りて行くと兎を横啜えにした、さんが得意気に、わしのところに放り出すように兎を置いて「撃ち損ねたから捉まえたぞ。」この犬の元の姿が見えた。「もう一度試したい」。

一晩して今日が、今猟期の最終日。朝から暗く、雲行きが怪しい。早々に猟場に着く。こんな日の兎は、雪が積もらない内に腹二杯分も食つておこうと、夜が明けても稼いでいる。

さんを放すと早ぐ臭いに乗って走り出し、そのまま追い鳴きに繋がった。三〇分程して松林の外れをピョンピョンと兎が通った。撃つには遠い距離だ。しかし今回は、試しだから通り過ぎた所へドンツと、昨日同様、その位置か

ら追い鳴きは止まった。二〇分程すると雪に変わりそうな冷たい雨が、音もなく降り出した。

さんが戻つて来た、兎を啜えて。予想した通り短い時間で兎は、走れなくなったようだ。兎は、夕べ一晩中働き、運動し、いつも眠る時間になつても寝ないで稼ぎ通し、疲れ切っている所をハイスピードの犬に追われてたちまち失速した。

ちなみに、兎がこの状態の時は、足の遅いビーグル犬に追われても、昼頃には「ダウン」（心不全か）して捉えられる事もままある。「睡眠不足」は生命（いのち）に関わる。

「さんは、今現在わしにとつては、上級犬だ」。しかし来猟期が終わる頃までは確実ではない。一年経つて今と同じなら兎犬として立派なものだ。

名兎犬とは、兎が犬を騙すあらゆる術（すべ）を駆使しても、迷う事なくゆっくり確実に臭線を辿つて途切れる事のない追い鳴き、その凄いや言える程の美声をも楽しみながら半日掛かりで射止める、そんな兎をしてくれる犬が名兎犬だ、と言う人、そんな相手任せの猟は性に合わないと言う人足の早い人、ゆっくりの人、若

い人年老いた人、気の長い人短い人、それぞれその人の為の「名犬」であつて、他の人にはただの普通の猟犬かもしれない。

あれとの猟でのことは、たかだか五日ばかりの事だけれど、もう一つ見つけた。

兎が一晩中稼ぎ捲つて朝方寝屋に入る時、一直線上を歩んで来てストンと寝ると、臭いを辿つて来た敵に簡単に見つけられてしまう。

なので、その晩、餌場に決めた領域を八重文字蜘蛛の巣状に、しかも計画的に歩き働いて、臭いだらけの中の一点に、通らない臭わない所を拵（こしら）えておいて、臭いの線から横に一つ飛び、三メートルも跳んで寝る。昼間、傍らの臭線を犬が通つても動かない。別に同じような所を跳ねて跳ねて数十メートル、もう一箇所作つて敵を捲（ま）術（すべ）を考ずる、頃経た奴（こころへ）（十二分な経験者）もいる。

さんが、臭線を辿つて行つたり来たりの茅藪の中、主から見えない所を数十分、どこへ行つちやつたのかな？、待ちきれなくなつてつい大声で「どこ行つた！さんつ！」「キヨン」、返事をした、さんが。今まで、この歳になるま

で「返事をする猟犬」は聞いた事がない。無論、搜索をやめる事はない。

この事は、どの猟犬も同じ。今、乗っている臭線を放棄して、呼ばれたからと言って戻る事はない。上の部の猟犬なら主人の見えない所での搜索中も、主人の位置は把握していて、兎をその方向に追い出すべく、頭を使っている。また起こした兎の追走中でも、タズマに居る主人の気配を感じとつて急に激しく鳴くとかーして、主人（相棒）に合図をする犬もいる。また主人もそれが解らねば相棒とは言えない。

ともあれ名前を呼ばれた、返事をする、これは凄い事だ。それだけでも名犬の部だ。詰まるところ、さんは納まる所に収まった。

私が、想像するに、元のあれは主人の猟の手伝いの為の猟犬の域を越え、自己主張を優先。先ずは、沢山獲る事に専念、兎狩りが楽しくて楽しくて、相棒は射ち損ねた。それなら俺が獲って来る、その啜えて来る時のどうだ顔。

元の主人も兎狩りが大好きこの広い山で犬が追っている兎が「予想した一点にかかる」、山を知り尽くした野兎の行動を見抜けた、と一人悦に入る。兎を獲

る以前に、その満足感が何とも心地良かった。だから、兎猟の「犬」は可愛かった。

しかし、主人は鉄砲の腕は今いち、外す事が少なくないから、あれが兎を捉える率は多くなる。搜索中、呼べば返事はするが、従う訳ではない。度重なる程に、あれとの「狩行」が、虚しいものに思えてくる。

セルフハンティング（一人猟）を止める手段はないか、主人は考えてあれが狩った事のない、知らない地形の山へ行けば一人猟をしないかも知れないと。

猟友から聞いた遠く他県の現場へ出掛けて行った。地形はむろんの事その他にも色々条件の異なる山。

富士山麓高原、一面に茅草の大野原。今まで経験した事のない平地。しかし、この草原には「過ぎた数の兎が居る」事を主人は聞いていなかった。

犬が起きた兎を追って行く。途中別の兎の寝屋にぶち当たる。新たな兎が跳びだす。この山での狩りの仕方を知らない犬は、新たな兎に乗り換えてしまう。最初の兎とテリトリーが違うから初めの山は走らない。

主人は、張ったタズマに来そう

もないので、追い鳴きの方の山に移動する。皮肉な事にその頃には、また次の兎に乗り換えているから必然的に山も変わる。山を知って先手を打たない限り何時間追ってもタズマにかかる事はない。

犬は、度々兎を眼にするので疾走、体力を消耗、兎の方は次々代わるから余裕。あれは山中兎の匂いにすっかりのぼせ上って、疲れも忘れ、追い鳴きも忘れて、ただひたすらに追う。その頃には、足の裏は破れ出血。大野原は全面焼け砂、ヤスリ同然、痛む足でうろちよる、果ては方向音痴に。主人も力を入れて呼子を吹くけれど、足下は四面焼け砂、音を吸い込んで響かない。夜も更けて仕方なく宿り、翌朝、原に来て見れば「演習に付き立ち入り禁止」、もう土曜日までは入れない。仕方なく外側の道路を一日中行ったり来たり。結局、主人は諦めた。

自分の考えで行動するあれも、この山へ来た朝、山についた時の停車位置が見つけられない。主人の後を追いたくても「出発点がない」遠い我が家に旅をする自信も、失せて。

猟犬物語

勝又 訓男

番外編

おわりに

都会の家屋は爆撃で焼かれ、

一時凌ぎの掘建小屋の街、その街

は復興再生に必要と国が力を入れ、県、農林業者をも巻き込んで山の頂上の方まで植えた杉、檜（黒木）だが。それから二十数年後。材木の輸入が許可になり、安価で取引され、高い手間賃の日本の材木は使われなくなつた。従つて間伐、枝打ち等の手入

れもされず、陽陰のトウモロコシ様に細く長く密集し、丈は大木並み、根はお互いにぶつかり合つて広がれず、盆栽並みでぐらぐら、下生の低木、笹、茅、草に陽は届かず枯れて、大雨が降れば地表は削られ、泥で重たくなった雨水は裸の土手を崩し、谷際の林木も誘つて谷川を塞ぐ、あげくに鉄

砲水となつて、本川に合流、工場や家庭の雑排水をも含めてプラシクトンが発生しにくい瘦せた泥水を大量に押し出し、深く海底

に沈む、深海の生物にも徐々に徐々に問題を起す。

山の自然が、落葉樹、常緑樹や原野に覆われていた頃は、落葉や枯草が積もって発酵し、そこを通った栄養豊かな雨水は、谷に吹溜まった落葉をも抱えて本川に合流し、大量のプランクトンを湧かす肥えた水を海に注いだ。

東北地方は自然林が多く、秋、木や草や蔓草の実が熟して落ちた所に雪が積もり、春、溶けるまで実はそのまま。春、鳥たちは餌が充分あつてその上、梅雨は軽い。雉、山鳥はそんな環境の東北地方で大繁殖する。育った若鳥たちは秋が来ると雉も山鳥も、雌雄別々の群れをつくって南へ向つて移動する。何故か、雪深いこの地では鳥たちの餌場と言えば、谷川や、里の小川の岸辺、農家の屋敷周り位しかない。しかもそこは親鳥のテリトリー（領域）でもあり、到底大勢の若鳥たちの食糧はない。丁度、親離れの時期でもあり。

南へ向かつて旅をする若鳥たちは、気に入ったところで冬を過ぎ、立派に成長して、春が来ると、今度は郷（ふるさと）に向つて旅をする。

逞しくなつた若雄は途中地鳥（其処に住み着いている鳥）に恋をして一草鞋（わらじ）を脱ぐ。若雌も美面（いけめん）を見つけて愛の巣を。

群には地鳥の若者も紛れ込んで（近親繁殖を防ぐ自然の法則）東北の地を目指す。

しかし今、頂上近くまで杉、松にしてしまった山に蔓草や雑木の実も殆どなく、昆虫の温床になる落葉もない。山でしか暮らさない山鳥の群れは、尾根から尾根への旅に、欠くことの出来ない餌が繋がっていかない。

植えに植えた黒木の下生の低木や蔓草、笹が狩れた平成の初期頃から、地鳥の子連れも見かけなくなつた。今では山鳥自体見る事は適（かな）えられない。では平地を好む雉はどうか、雉は山が駄目なら川原、稲刈り後の落穂を拾いながら田畑周りの草地等を渡つて旅が出来る。でも群鳥どころか田畑で見かけた個々の雉も殆ど見ることはなくなつた。

田畑は除草剤、殺菌剤、殺虫剤と薬漬け、落穂や葉草を食つて旅をすること数ヶ月、若鳥の身体に薬物が滲み込み、結果は不妊症。農地の休耕田（各農家は田ンボ面積の二割は、米を作るな）

と国の指示。日本の食料自給率は二十%以下と言ふのに、その荒らし田の茅藪（ぶっしゅ）に住みついた雉の番（つがい）、初夏になつても仔雉を連れていくことはない。

シベリヤで繁殖し、大群で季節風乗つて北海道へ本州に渡つて来て、畦畔（けいはん）（田まわりの土手の意）の草地に沿つて南下する鶉（うずら）も同様。

国や県の森林管理事務所は自然林を増やすのではなく、現在（十年程前から）、自然環境保全？と言ふうたい文句を掲げて、

今ある密集林を思い切り間伐して、林床に陽を当てるべく努力をしている。しかしお互いに寄りかかり合つて立っている、伸び過ぎの林を空（すか）かせると、雪が積もれば重みで折れ、里山の林木は風に煽られれば、倒れて電線を押さえ、道路を塞ぐ。間伐の成果があがり、下生（したばえ）の蔓草に実（み）が生るのは十五年〜二十年先か？。同じ林床に芽を出した雑木が、黒木と並び立つのはもつと先くその並び立つた雑木の木の葉（は）が一杯積もつて発酵し、其処を通過した汚れのな

い、肥えた水が深海に届くのは三十年先位か？、そうなつてくれれば嬉しい。

移動する山鳥の群れは、富士箱根伊豆の山、南アルプス〜天竜の山では、とうに見られなくなつたけれど。奥羽山脈〜榛名山〜関東台地〜北アルプス〜飛騨〜鈴鹿への、北側ルートが、生きていくことを願うのみです。

長い尾羽根をなびかせて舞い下る〜赤山鳥の優雅な姿を（山鳥の沢下り、と言ふ）紀州では今でも見られるだろうか。

移動する遺伝子（いででんこ）はくもしかし絶えて終（しま）うのかも知れない。

山野に雉、山鳥、小綬鶏、鶉（主に地上で暮らす鳥）がいなくなれば、ポインター、セター等の鳥犬（とりいぬ）に、人と共獵する獵犬としての手解（てほど）きを、実地で訓練することも出来ず、それ以前にその必要もなくなる。

ビーグル（兎犬）も然り。若し、数十年先、今日の努力が実を結び、山が自然を取り戻したとき、元獵犬だった彼等に、獵犬の血（一日中、山野を走り回つ

て獲物を搜索していた強靱な体力と、百メートルも先の臭いも取る臭覚力)は蘇ることが出来るものゝであらうか。

昔のもの語りゝに、
なつて終うのかも知れない。

【番外編・完】

それにも増して、区内の皆様方わたくしめ、私奴の生涯の道楽(趣味)から生まれた無駄話に永いことお付き合いを頂きまして誠にありがとうございました。

日々、書いたり、消したり、楽しく過ごさせて頂きました。秋が来ると九十三歳。

私は、幸せ者です。
皆様、
本当にありがとうございました。

謝辞

勝又 訓男

【猟犬物語 おわり】

この猟犬物語は、この地域の大切な歴史の一つであり、それを伝えて行けるものであるから、「公民館だより」に掲載すべきと推挙して頂き、更に総体的にご指導も頂いた三井 明先生、また公民館だよりへの掲載・連載を快諾頂いた区長さん・役員の方々、私のところへ小まめに往復して誤文誤字等も含め校正の手助けをして頂いた(当時)区広報の寺内聡さんと担当の方々、大変お世話になりました。ありがとうございました。